

## 主婦の住生活における時間と空間の利用

野 津 哲 子

(被服構成学第II研究室)

### A Study on the use of Time and the use of Space by Housewives in Their Home Life

Tetsuko NOTSU

#### 1. はじめに

主婦の住居内における家事労働の内容は、従来多様な側面をもち衣・食・住・育児も含めて多岐にわたり、繁雑で量的にも極めて多い作業を行っている。主婦の住生活は社会環境の変化にともない生活観も住生活様式も変化した。近年、女性の社会進出ということがよくいわれている。その背景には、女性の学歴水準が高まっており、仕事を持ってそれを活かそうという人が増えている。一生のあいだに生む子どもの数が減って、子育ての期間が短くなっている。電気洗濯機などの電化製品の普及などによって、主婦の家事の負担が軽減されてきたことなどがある。

女性の労働力率を年齢別にみても、20歳代と40歳代で出産や子どもを育てている時期にあたっており、働く人の割合が低くなっているが、昭和50年より昭和60年へと年を追って上昇傾向にある。また40歳代を中心として中年層でも、働きたいと考えている人の割合が増している。

女性の労働に対する考え方が年齢別にみたときにこのような傾向になるのは、女性の就業に対する考え方として、約半数の人が「職業を持ち、結婚や出産などで一時期家庭に入り、育児が終わるとふたたび職業を持つほうがよい」という考え方をしていることを反映している。それは主婦の生活時間の著しい<sup>1)</sup>変化で余暇時間が増加したことになる。総理府の

「国民生活に関する世論調査」においても「今後の生活の力点はどこにおくか」という質問に対して、「レジャー・余暇生活」と答えたものは、昭和49年以降増加を続け、昭和58年5月調査では、それまで最も多かった「住生活」を上回り、昭和62年5月調査では全体の31.6%に達している。豊かな住生活をするためには、余暇生活の充実が必要である。そのためには、ゆとりある余暇を過ごすことのできる環境を整備することが重要である。

そこで今回は、主婦が一日の生活時間の流れの中で、どのような住生活をしているのか、住空間との相互の関連性について検討し分析を試みたので報告する。

#### 2. 調査概要

##### 調査対象および時期

本調査は1985年7月～1986年9月である。本学学生の世帯およびその知人の世帯の主婦である。調査は調査票留置法によって行い400世帯に配布した。有効回収率は87.5%であった。

調査対象の家族および居住者の属性状況は第1表のとおりである。表より世帯主が30代後半から50代の家族が多く、家族数は4人家族が中心である。主婦についてみると、年齢は50歳代が多く約7割までが専業主婦となっている。

### 3. 調査結果および考察

#### 1) 平日の主婦の住生活時間

すまいを場に家族として毎日繰り返している住生活も、時間的・空間的に分析すれば雑多な生活行為が考えられる。本調査では第2表に示すような4つの分類を行って生活時間の分析を試みた。

(1)生理的生活時間：人が健康で人間らしく生活して行くために生理的な面から費される時間。これは乳幼児から老人に至るまで共通に基本的に必要な生活時間で、時間的には年齢、労働内容によって異なる性質のものである。

内容的には睡眠、食事、身仕度（洗面、入浴、着替）用便、医療、休息などがある。この中で最も大切なのは睡眠の管理である。睡眠は生理的生活時間の大部分をしめている。その必要時間は年齢によって大きな差があり、管理の巧拙は生理的、能率的に影響が大きい。

(2)収入労働的生活時間：生活時間の中で人々が主力を注いで意欲的に心身を働かせている時間を総括的に考える。就業している家族にとっては収入的生活時間がこれに入る。収入的生活時間の中には通勤時間や昼食時間など半拘束的な時間も含める。

(3)家事的生活時間：主婦として家庭管理の仕事に主力を注いでいる人。技術革新と耐久消費財の普及は主婦の家事的生活時間に変化を与えた。家事的生活時間は誰でも代行できる時間であり、文化の進歩によっては機械がこれを代行したり、社会施設が代行することも可能な性質をもつものである。

(4)社会的・文化的生活時間：生活時間の中から基本的に必要な生理的生活時間と拘束的要素を持ち生活時間の中心的存在の役割を持つ労働的生活時間を差引いたものが社会的文化的生活時間である。交際、教養娯楽、運動、雑談などがこれに入る。以上が生活時間の区分の考え方である。

調査対象の主婦の住生活の傾向は要約すると次のようである。午前6時から7時までの間に起床している者が全体の82.2%いる。食事をとる回数は3回と答えた者が全体の86.1%を占め高率であった。朝食の時間は7時ごろが最も多く全体の64.4%、昼食は12時から13時の間に97.0%の者がとっている。夕食は19時前後が最も多く全体の64.5%、次いで18時ごろが23.6%となっている。就寝時間は23時から23時30分の間と答えた者が全体の65.3%である。睡眠

時間は7時間が最も多く41.6%、次いで6時間25.8%、8時間18.8%の順である。夜は社会的・文化的生活行為時間にあてた生活がなされている。

第3表は主婦の24時間の使い方をまとめたものである。生理的生活行為時間の全体の平日平均は515分で最も多く、次いで社会的・文化的生活行為時間が345分、収入労働的生活行為時間340分、家事的生活行為時間240分の順である。生理的生活行為時間の中の最も大切な睡眠時間についてみると、主婦は家事的生活時間のしわ寄せとも見られる。また平日よりも休日の睡眠時間が著しく増加しているのは、平日の不足を休日で補っているためと思われる。主婦の住生活時間は全体的に拘束時間が少ないために睡眠を除いては全体的にゆとりが見られる。特に食事と教養娯楽の時間にそれがよく現われている。

家事的生活行為時間については、男子もある程度のことを手伝っていることがわかる。既婚者では掃除が最も多くなされているようである。独身者では洗濯などが多いといわれている。

社会的・文化的生活行為時間については、教養娯楽の時間がその主要部分をしめている。これはテレビ、ラジオなどの普及によるためと思われる。余暇を持って余してテレビをみる人もあれば、目的をもって番組を選択してみる人もある。したがって各自の生活態度が問題になってくるとと思われる。

文化の進歩によって収入労働的生活行為時間は変動する性質を持っているので、近來男女とも社会的・文化的生活行為時間は増大の傾向を示している。いわゆる余暇の増大である。

第4表は年代別による家事的生活行為内容を平均時間で示したものである。

主婦の家事的生活行為の内容を分析すると主に家事作業に従事していると思われる。家事作業の主要部分は炊事である。毎日繰り返して行われ、しかも、肉体的にも精神的にも負担の重いのが食生活に関する労働である。食事のもつ意義から考えて家族集って楽しく食事をすることは、お互いに健康を確かめ合い、喜び、一日の活動意欲を高め、疲労も回復するなど家族の喜びを食事にも反映させたいものである。家族の健康に注意をはらいつつ炊事に携わることは、健康管理者として主婦の大きな役割である。

掃除、洗濯の減少は電気掃除器や電気洗濯機の普及に相当の関連があると思われる。これによって従来の苛酷な家事労働を軽減し、その質をも変えた。

第1表 居住者の属性

|                   |              |       |                   |       |       |
|-------------------|--------------|-------|-------------------|-------|-------|
| 家族<br>人数          | 2人           | 10.3% | 世帯<br>主<br>年<br>齢 | 20歳代  | 8.6%  |
|                   | 3人           | 10.9% |                   | 30歳代  | 24.6% |
|                   | 4人           | 31.5% |                   | 40歳代  | 28.3% |
|                   | 5人           | 17.4% |                   | 50歳代  | 26.3% |
|                   | 6人           | 13.7% |                   | 60歳以上 | 12.2% |
|                   | 7人           | 11.4% |                   |       |       |
|                   | 8人           | 3.1%  |                   |       |       |
|                   | 9人           | 1.7%  |                   |       |       |
| 家族<br>構<br>成      | 夫婦のみ         |       |                   | 10.3% |       |
|                   | 夫婦+学齢前の子供    |       |                   | 12.0% |       |
|                   | 夫婦+小学生       |       |                   | 20.0% |       |
|                   | 夫婦+中学生       |       |                   | 22.6% |       |
|                   | 夫婦+高校生       |       |                   | 24.6% |       |
|                   | 夫婦+高校卒業以上の子供 |       |                   | 8.0%  |       |
|                   | 夫婦+(子供)+直系家族 |       |                   | 2.5%  |       |
| 世帯<br>主<br>職<br>業 | 公務員          | 16.0% | 主<br>婦<br>年<br>齢  | 20歳代  | 9.4%  |
|                   | 会社員          | 55.7% |                   | 30歳代  | 21.7% |
|                   | 商業           | 10.3% |                   | 40歳代  | 27.4% |
|                   | 建設業          | 4.0%  |                   | 50歳代  | 33.2% |
|                   | 自由業          | 11.4% |                   | 60歳以上 | 8.3%  |
|                   | 無職           | 2.6%  |                   |       |       |
| 主婦<br>職<br>業      | アルバイト・パートタイム |       |                   | 14.9% |       |
|                   | 専業主婦         |       |                   | 67.1% |       |
|                   | 共働きの主婦       |       |                   | 18.0% |       |
| 主婦<br>の<br>学<br>歴 | 中学卒          | 6.0%  | 居<br>住<br>室<br>数  | 2室    | 2.9%  |
|                   | 高校卒          | 44.6% |                   | 3室    | 18.6% |
|                   | 短大卒          | 31.4% |                   | 4室    | 28.9% |
|                   | 大学卒          | 9.7%  |                   | 5室    | 19.4% |
|                   | 旧女卒          | 1.4%  |                   | 6室    | 9.1%  |
|                   | 高小卒          | 6.9%  |                   | 7室    | 6.0%  |
|                   |              |       |                   | 8室    | 5.7%  |
|                   |              |       |                   | 9室    | 4.0%  |
|                   |              | 10室   | 2.9%              |       |       |
|                   |              | 11室   | 2.5%              |       |       |

家事作業は家庭の状況、主婦の就業の有無とその生活観と態度が確立した後、主婦とその家族の状況に応じて、家族の幸福感を阻害しない範囲において家事作業を簡素化し、家事的な生活時間を短縮して労働的、または社会的・文化的生活時間を増大して行くようにすることこそ真の合理化であると考え。女子労働者の家事的な生活時間は一般の主婦からみれば少ないが、これが他の生活時間を圧迫していることは否めない。

第1図は専業主婦・共働主婦の平日および休日における生活時間を示したものである。平日について全体をみると生理的生活行為に35.7%費やしている。そのうち睡眠が25.0%と高い値をしめている。次いで食事5.6%、身のまわりの用意5.1%である。2位は社会的・文化的生活行為で24.8%である。その内容はテレビをみるが8.4%、ラジオをきく4.9%、新聞・雑誌・本をみる3.5%、休養をとる3.1%、レジャー活動2.8%、交際2.1%の順である。3位は収入労働的行為で23.5%である。仕事为主で16.0%、通勤などが7.5%となっている。4位は家事的な生活行為で16.0%を占めている。電気炊飯器、掃除器、洗濯機、冷蔵庫などの電化製品が家庭に普及し家事労働が軽減された。炊飯器は炊事の中でも最も手間のかかる炊飯作業を簡略にしたと思われる。

休日について全体をみると生理的生活行為のための時間は656分で一日の約半分の45.6%、社会的・文化的生活行為のための時間が26.7%と一日の約3割、家事的な生活行為のための時間が17.4%で一日の約2割を占めている。

平日における生理的生活行為時間について専業主婦と共働き主婦を比較してみると5.5%程度の差であった。社会的・文化的生活行為の時間は6.5%の差、家事的な生活行為の時間は4.3%差、収入労働的生活行為の時間は共働き主婦の方が16.3%も長く労働していることがわかった。専業主婦が家事のための行為時間の占める割合が多いのは、一日中家にいるため時間が十分あることから、ていねいにやっているものと思われる。

家庭婦人の家事時間の全国平均をみると、昭和60年には平日449分、土曜日426分、日曜日368分となっており、昭和45年にくらべてそれぞれ28分、32分、18分短くなっている。このような家事時間の減少の要因としては、家事の省力化、外部サービス化の進行や、子供数の減少といったことがあげられる。

第2表 生活行為の分類

| 生活                | 生活行為   |  |
|-------------------|--|--|
| 生理的生活行為時間         | 睡眠<br>食事<br>身の回りの用事  | 睡眠<br>食事<br>洗面、身じたく、化粧、髪の設定、散髪、入浴  |
| 収入労働的生活行為時間       | 労働   | 仕事、勤務、商売、店番、行商、配達、外交販売、出張、農作業、山仕事、家畜の世話、出漁、内職、仕事の準備  |
| 家事的生活行為時間         | 家事   | 炊事、食事の準備や後かたづけなど、掃除、洗濯、裁縫、編物、家事手伝いなどの雑用、子供の世話、家族の世話、病人の世話、買物   |
| 社会的・文化的<br>生活行為時間 | 新聞・雑誌<br>テレビ・ラジオ<br>教養・趣味・娯楽<br>・運動・散歩<br><br>休養・団らん<br><br>交際 | 新聞、雑誌、書物などを読むこと<br>テレビ・ラジオをきくこと<br>映画、演劇、スポーツをしたり見たりすること、生花、手芸、音楽、洋裁学校、自動車教習所、英会話塾などへ行くこと、レコード、散歩、ハイキング、庭いじり、小鳥の世話、遊び<br>休息、ぶらぶらしていること、お茶、間食、雑談、一家団らん、療養、診療を受ける<br>仲間づきあい、会合、行事の出席、来客との応待、知人親戚訪問、冠婚葬祭、手紙、見舞、教会 |

第3表 24時間の使い方の変化

| 生活時間            | 項目       | 曜日    |       |
|-----------------|----------|-------|-------|
|                 |          | 平日(分) | 日曜(分) |
| 生理的生活時間         | 睡眠       | 360   | 480   |
|                 | 食事       | 80    | 113   |
|                 | 身のまわりの用意 | 75    | 63    |
|                 | 合計       | 515   | 656   |
| 収入労働的生活時間       | 仕事       | 230   | 84    |
|                 | 通勤など     | 110   | 65    |
|                 | 合計       | 340   | 149   |
| 家事的生活時間         | 家事       | 240   | 250   |
|                 | 合計       | 240   | 250   |
| 社会的・文化的<br>生活時間 | 交際       | 30    | 35    |
|                 | 休養       | 45    | 55    |
|                 | レジャー活動   | 40    | 85    |
|                 | 新聞・雑誌・本  | 50    | 90    |
|                 | ラジオ      | 70    | 30    |
|                 | テレビ      | 110   | 90    |
| 合計              | 345      | 385   |       |

休日について生理的生活行為の時間をみると、専業主婦は一日の約6割を費し共働き主婦より1.7倍も多く働いている。社会的・文化的な生活行為の時間では共働き主婦が一日の約4割を費しているのに対し専業主婦は約2割弱短い。共働き主婦は社会的・文化的な生活行為の時間が一日の約4割を占めている。これは休日に日頃の疲れをとるためと思われる。一

日の生活の中で何もしない空白が存在しているのは、自分の仕事を反省したり、人生を考えなおすチャンスを与えてくれる。こういうきっかけがわれわれの生活にとって、休養の意味がある。

第2図は一日当たりの平均視聴読時間を示した。

全国民の一日当たりの平均視聴読時間はテレビが昭和50年には210分、55年206分、60年187分で減少の傾向がうかがえる。ラジオは昭和50年には34分、55年37分、60年30分と減少が目立っている。新聞・雑誌・本の購読時間は昭和50年は33分、55年37分、60年35分と安定しており、若年層では増える傾向にある。画一的な情報伝達手段にはあきたらず、専門的、特殊な情報伝達手段に目を向け始めているためと考えられる。つまり自らの意思で多様な情報伝達手段を選び、情報を選別する時代になってきたと思われる。本調査ではテレビをみる時間は110分で全国平均よりかなり低い値を占めている。ラジオをきく時間は70分で全国平均をはるかに上回っている。新聞・雑誌・本の購読時間は50分で全国平均より約20分程度多く読んでいる。主婦としての教養を高め消費者としても情報化社会の中で生活の展開を行っているものと思われる。

第5表は減る炊事時間と増える外食、調理食品を

第4表 年代別家事平均時間

(単位：分)

| 年代 \ 項目 | 炊事  | 掃除 | 洗濯  | 買物 | 子どもの世話 | 家庭雑事 |
|---------|-----|----|-----|----|--------|------|
| 20 歳 代  | 100 | 12 | 25  | 35 | 80     | 40   |
|         | 115 | 05 | 36  | 47 | 100    | 46   |
|         | 105 | 20 | 47  | 56 | 115    | 52   |
| 30 歳 代  | 170 | 30 | 70  | 20 | 90     | 90   |
|         | 160 | 42 | 87  | 45 | 125    | 105  |
|         | 145 | 52 | 100 | 50 | 140    | 112  |
| 40 歳 代  | 150 | 40 | 80  | 35 | 20     | 100  |
|         | 155 | 45 | 95  | 50 | 30     | 113  |
|         | 170 | 56 | 110 | 57 | 36     | 120  |
| 50 歳 代  | 140 | 30 | 40  | 35 | 15     | 65   |
|         | 135 | 34 | 47  | 46 | 20     | 80   |
|         | 150 | 48 | 50  | 65 | 30     | 95   |
| 60 歳代以上 | 100 | 35 | 15  | 45 | 32     | 30   |
|         | 115 | 45 | 20  | 50 | 42     | 45   |
|         | 107 | 50 | 35  | 90 | 30     | 54   |

各欄の上段平日，中段土曜日，下段日曜日

第5表 減る炊事時間と増える外食・調理食品

| 項目 \ 年        | 昭和45年* | 昭和50年* | 昭和55年* | 昭和60年* | 昭和61年* | 昭和62年* |
|---------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 炊事時間 (分)      | 153    | 146    | 142    | 137    | 158    | —      |
| 外 食 (%)       | 3.03   | 3.28   | 3.67   | 3.82   | 3.41   | 3.95   |
| 調理食品 (%)      | 1.22   | 1.40   | 1.68   | 1.76   | 1.64   | 1.82   |
| 有配偶者の労働力率 (%) | 48.3   | 45.2   | 49.2   | 51.1   | 44.8   | 51.3   |

炊事時間は30代女性の1日平均の時間

\*印全国平均 ◎印本調査

第6表 自由時間

単位 (分)

| 年代 \ 年齢 | 20～24歳 | 25～29歳 | 40～49歳 | 50～59歳 |
|---------|--------|--------|--------|--------|
| 昭和51年*  | 334    | 303    | 292    | 315    |
| 昭和61年*  | 349    | 255    | 298    | 327    |
| 昭和61年*  | 351    | 264    | 246    | 342    |

\*印 全国平均 ◎印 本調査

示した。時系列的にみても女性の労働力率の上昇とともに炊事時間が減少し、外食や調理食品の割合が増えてきている。女性の社会進出に伴い家事の外部分化など消費のサービス化が促進されていると考えられる。

冷蔵庫は生鮮食料品や加工品、インスタント食品

のストッカーとして、豊富な種類の食品の摂取を常時可能とし、現在では冷凍庫付きも一般化した。このように電気冷蔵庫や炊飯器、その他、オーブン、ジュースサー、ミキサー、電子レンジ、皿洗機、乾燥器等の台所用品は主婦の炊事作業を軽減し、家族員誰もが炊事作業に加わることを可能にし、炊事様式を大きく変えた。

掃除機の普及は住居の日常的な維持管理作業である掃除の質を高め、微細なじんあいを排除することが可能になった。これはじゅうたん床の掃除に適している。ほうき掃きや、

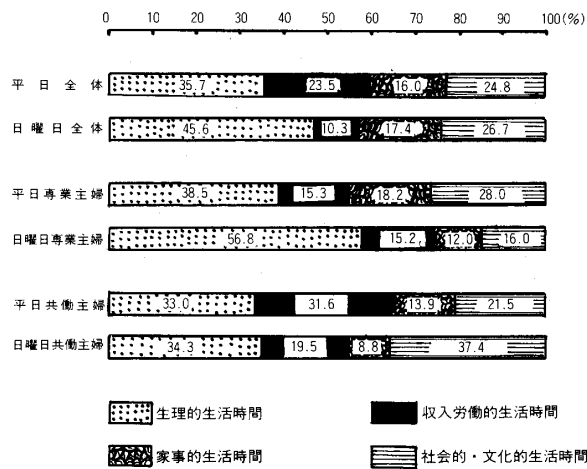
はたきかけ雑布がけが減少したと思われる。

洗濯機は家事労働の中でも最も労力を要する洗濯作業を軽減した。

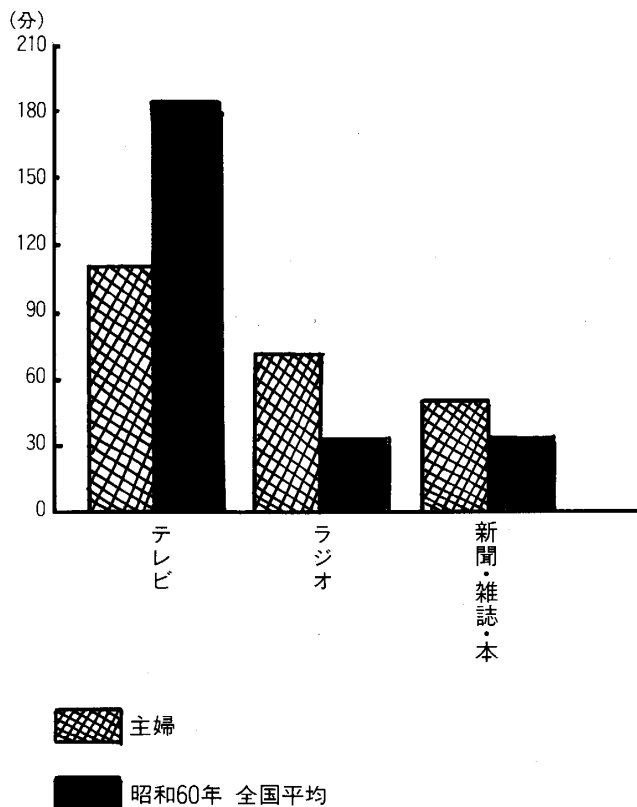
耐久消費財の中でも家事労働用品は全国に90%以上普及した。その理由は、家事労働の軽減に大きな役割を果たしたからである。大量生産体制のもとで働きに出た主婦の家事労働の代替、補助としてこれらの家事用品が各家庭に吸収されていったと思われる。

労働時間の短縮や家事の省力化などがすすんで、一日の生活の中での自由時間は増加してきている。

一日の生活の中での自由時間の推移をみると昭和60年の自由時間は、平日で231分、土曜日で279分、日曜日で368分となっており、昭和45年にくらべて、それぞれ15分、32分、20分長くなっている。



第1図 専業主婦・共働主婦の生活時間



第2図 1日当たりの平均視聴続時間

さらに、年次ごとにみると自由時間は昭和45年から昭和50年にかけて大幅に増加しており、50年以降はあまり増加せず横ばい気味で推移している。

第6表は自由時間を示した。自由時間の実態について、総務庁「社会生活基本調査報告」の若年層と中年層の生活時間の中の自由時間をみると、若年層の方が長いものの10年前と比べてそれほど変化していない。こうしたことから、自由時間の格差が「拡大した」と感じる人と「変化していない」「縮小した」と感じる人は、ほぼ同数となっている。

2) 住空間における主婦の通過頻度

多彩な空間によって構成される住生活の場は、家庭生活がもたらすいろいろな性格を支えながら、それぞれ有機的なかわりを保ち、住まい全体としての空間を形成している。住生活の行為とこれを定着させる場は、いずれも時間的に住空間を形成している。家族のだけれど、いつ使用するかということは、どこで何に使用するかということと同じように大切な要素となっている。また住生活を構成するそれぞれの行為が、時間的変移の中に住まいのどこの部分に定着していくのかをみる可以考虑。

第7表は居住室数と動線頻度数との関係を示したものである。表より室数が増せば全頻度数も増加の傾向にあることがわかった。

第3図は家族構成と台所との関係頻度を示した。表より家族構成員が多いほど台所への関係頻度は顕著である。通過頻度を構成員別にみると9人以上の場合が最も多く186回、次いで8人179回、7人147回、6人132回、5人126回、4人105回、3人96回、2人47回の順である。台所は、主婦の家事作業の中で最も長い時間を費す場所である。また、家族や子供のつながりを考えて、居間や食堂に近い場所にとられていることもあるので使用通過頻度も多くなると思われる。主婦がいつもいる部屋としては台所・居間の間がほとんどで多忙さがうかがえる。

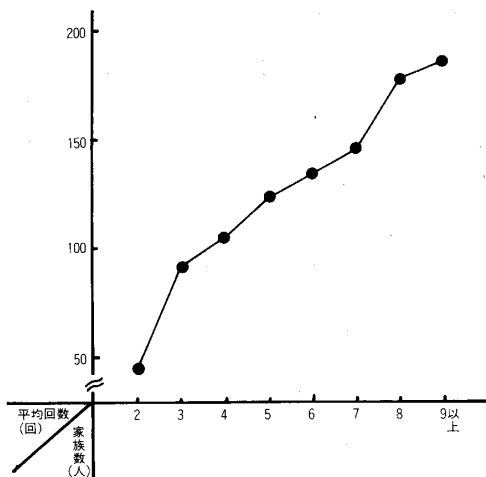
第4図は職業別にみた食堂・台所への関係頻度を示した。表より一日の平均通過頻度が最も高いのは専業主婦の139回、次いでアルバイト・パートタイムの主婦135回、共働主婦126回の順である。

朝についてみると全体的には通過頻度は低い。夜については全体的に通過頻度が高い。これは夜家事のための行為を行っているものと思われる。

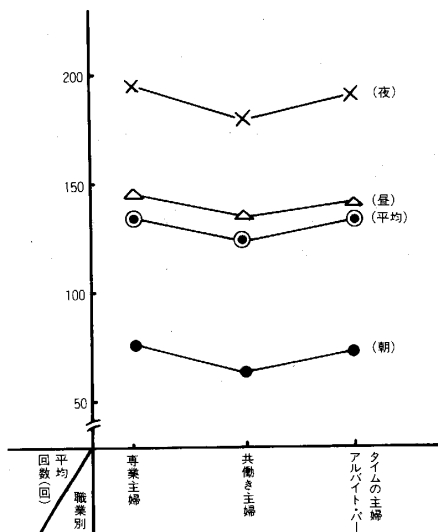
食事は朝、昼、晩の食事が一般的に習慣づけられ

第7表 居室数と動線頻度数との関係

| 居室数 | 平均頻度数(回) |
|-----|----------|
| 2室  | 86       |
| 3室  | 197      |
| 4室  | 205      |
| 5室  | 219      |
| 6室  | 242      |
| 8室  | 261      |
| 9室  | 305      |
| 10室 | 347      |
| 11室 | 356      |
| 12室 | 361      |



第3図 家族構成と台所の動線との関係



第4図 職業別にみた食堂・台所への動線との関係

ているが、朝は時間的に余裕がないのでなるべく手間どらないように配慮しているものと思われる。

夕食は食事を楽しみながら家族とだんらんをする傾向があり、くつろぎの部屋として食事の楽しみを優先していると考えられる。

全体の通過頻度をみると居間と食堂（リビング・ダイニング）の間の通過頻度が最も高かった。これは食事をしながらだんらんを楽しんでいると思われる。小さな規模の住空間内においては、居間をゆったりとした雰囲気にしたため用いられていることがわかった。居間は家族の個室が確立されることによって生じる家族の集まり部屋としての必要性であり、さらに住まい外の社会的生活と住まい内の個人的生活の接点としての機能が付加される住空間である。したがって居間は住まいの中の中心的役割を果たすので他の部屋との連絡がよい位置にあるものと思われる。居間の中を人の動線が交錯するのは望ましいことではない。

2番目に通過頻度の高いのは食堂と台所（ダイニング・キッチン）であった。ダイニング・キッチンは食事の用意や後片付けなどの作業が、最も能率的に行われるためと思われる。

3番目は居間と食堂と台所（リビング・キッチン）の間の通過頻度が高かった。リビング・キッチンは居間と炊事のスペースが一緒になっている関係で幼児の面倒をみながら炊事をする主婦の場合が多いと思われる。また家族と一緒に炊事を手伝ったものと思われる。居間がリビングルームといわれるように、だんらんのほかに、食事をしたり、調理をしたり、来客の応接をしたり、子供の遊び部屋となったり、さまざまな住生活をこの部屋で行っていることがわかった。居間、食堂、台所それぞれの部屋をいろいろな目的で組み合わせ兼用していることもわかった。居間におけるだんらんは、各自の室でのひとりの意識から集団の意識が醸成される場として、社会的にのびていく拠点ともなるわけである。

炊事は家の中心部分より離して置くことが近年までの室配置であったが、主婦のここでの滞留時間の長いことから陽当りのよい南へもっていくことが考えられている。ダイニング・キッチン、リビング・キッチンの考え方がこの傾向を示している。

主婦の家事作業としては、出入の商人との対応や購入食品などの受渡し、浴場の給水や加熱の管理など関連した作業が同時に行われることが多いので、

そのかねあいで考えることも重要である。

住空間の構成を考える場合はそこに住む人がどのような住生活を営むかを端的に表現するものであるだけにどのようにきめたらよいかは、各人各様の希望がここにたくされている。

住む人によって描かれた動線は、居間、台所、食堂のような共通の部位に密集している。同一室に2つの出入口があれば、一方がより高密度になっていることが多かった。

室の構造上から、室を横切る動線もみられた。同一室内での動線は作業の能率に関係が深いもので、炊事室での道具の配置が問題になる。その他には勝手口や食堂への通路も問題になる。

動線は距離、密度、交錯性のほかに、個人の行動調査の目的ではその方向性が問題になる。たとえば自室から他の場所へ行動するとき、自室とその場所をいちいち往復するとは限らず連鎖的に動くこともある。

住生活の設備的条件は、昭和28年、29年以降家庭電化機械の普及によって急速に改善進歩しつつある。家事労働の軽減・能率からはじまって、最近では中央給湯装置などによる室内環境の改善まで、住生活の機械化はめざましい。

以上のことから住まいは、われわれの生活の容器であるが、その容器としての機能や構造は住生活行為によっておのずから異なってくる。種々の住生活行為にしたがって居住の場がいかにあるべきか、今後検討を加える必要があると考える。

#### 4. 要 約

住生活において大きな役割を担っている主婦が住まいの中でどのような住生活を行っているのか住空間と住生活行為時間との対応関係を実態調査を通じて明らかにした。

その結果を要約するとつぎのようになる。

1) 主婦の一日の住生活行為時間は、生理的生活行為時間が最も多く586分、次いで社会的・文化的生活行為時間が365分、収入労働的生活行為時間245分、家事的生活行為時間245分の順であった。

主婦の住生活行為時間は全体的に拘束時間が少ないために睡眠を除いては全体的にゆとりが見られる。特に食事と教養娯楽の時間にそれがよく現われている。

家事的生活行為時間の減少の要因は家事の省力化、外部サービス化の進行、子供数の減少といったことが考えられる。

2) 主婦の一日の住空間内での動線頻度は居住室数と家族構成によってかなり影響をうけることがわかった。全通過頻度をみると居間と食堂の間の通過頻度が最も高かった。居間は住まいの中の中心的役割を果たすので他の部屋との連絡がよい位置にあるものと思われる。居間の中を人の動線が交錯するのは望ましいことではない。2番目に通過頻度の高いのは食堂と台所であった。ダイニング・キッチンには食事の用意や後片付けなどの作業が能率的に行われるためと思われる。3番目は居間と食堂と台所の間の通過頻度が高かった。リビング・キッチンは居間と炊事のスペースが一緒になっている関係で幼児の面倒をみながら炊事をする主婦の多いことがわかった。居間、食堂、台所それぞれの部屋をいろいろな目的で組み合わせ兼用していることがわかった。

間取りは、そこに住む人がどのような住生活を営むかを端的に表現するもので、どのようにきめたらよいかは各人各様の希望がこれにたくされている。

家事についてやす労働は、なるべく能率化して動線の短縮をはかることが望ましい。

居間におけるだんらんは、各自の室でのひとりの意識から集団の意識が醸成される住空間として、社会的にのびていく拠点であることがわかった。

終わりに、本研究を進めるにあたりご協力いただきました学生の皆様に厚くお礼を申し上げます。

#### 参 考 文 献

- 1) 大蔵省印刷局：昭和63年 国民生活白書，93，147 (1988)
- 2) 小泉正太郎他3名：住居学，建帛社，94 (1983)
- 3) 住田昌二：現代住居論，光生館，121 (1984)

(平成元年10月31日受理)